1章◎分野別研究法　日本漢字音史

日本漢字音史の研究法

——平安・鎌倉時代を中心に——

佐々木勇

1　研究課題と意義

「日本漢字音史」とは、漢字の「音」「訓」というときの「音」の歴史である。よって、音韻史・アクセント史の一部門である。しかし、この特集のように、国語の音韻・アクセントとは別に論じられることが、現在一般的である。

それは、「音」が本来は外国語音（中国語音）であったためであり、他の外来語音と異なり、日本語の中に長い歴史を持ち、大きな位置を占めるからである。

たとえば、—『日本語学』（明治書院）九月臨時増刊号「日本語史研究入門」「分野別研究法」—のすべての漢字は、「音」で発音する。だが、大方の人は、指摘されてはじめて、そういえばそうだなと思う程度である。そのことに気づかないくらいに、漢字音は、日本語にとけ込んでいる。

日本漢字音史の研究は、中国語音が、いかにして現在の日本語の「音」になったのかを解明することを課題とする。日本語に大きな位置を占める漢字音の歴史的研究は、日本語の歴史と現代の姿をとらえ、その延長線上に未来の姿を見るためには、避けて通れない。この意義ある研究に、多くの人々が取り組むことを期待する。

「日本漢字音史の研究法」は、以下に掲げる優れた概説書・研究書の中で、すでに説かれ、実践されている。

本稿では、これまであまり活用されてこなかった資料と、これから配慮すべき研究法とについて、平安・鎌倉時代を中心に述べたい。

以下、「研究資料」と「研究法」とに分けて、記述する。

2 研究資料

日本語の歴史を知るためのすべての資料が研究対象となる。日本語を文字で表記することが始まった時点で、すでに漢字音が日本語表記に利用されているからである。

それら諸資料に記載された万葉仮名・平仮名・片仮名・反切・類音字・声点等が漢字音の研究資料である。反切・類音字・声点は、中国起源のものであり、それをまねて、後には日本漢字音に合わせていくようになる。声点は、中国語の重要な要素である声調を示したもので、これによって日本漢字音声調史を描ける。

[1] 従来の研究の対象資料

従来の主な研究資料は、漢文を音で通して読む字音直読資料と辞書類であった。それは、日本漢字音の体系をとらえる目的のため、規範的な音を記すと考えられる資料が選ばれたからである。

その成果として、日本漢字音における呉音・漢音・唐音などを、頭子音と韻とで体系的に整理した分韻表が公刊された。

小倉肇『日本呉音の研究』（一九九五年、新典社）

沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』（一九九七年、汲古書院）

原　裕「東京大学国語研究室蔵『佛母大孔雀明王経』字音点分韻表」（『訓点語と訓点資料』第一〇一輯、一九九八年九月）

李京哲「東京大学国語研究室所蔵『佛母大孔雀明王経』の分韻表」（『鎌倉時代語研究』第二十二輯、一九九年五月）

今後、これを活用した研究が期待される。

なお、右の諸分韻表で基礎資料が充分であるとは言えない。呉音についての小倉の著書は、『妙法蓮華経』の諸資料の整理であり、大般若経・最勝王経・仁王経・華厳経などが残されている。漢音でも、『蒙求』『佛母大孔雀明王経』のそれぞれ一本の分韻表が公表されたにとどまる。現存諸本を比較対照できる分韻表の作成と公開が待たれる。

字音直読資料ではあるが、仮名書き主体のものに、恵心尼（親鸞の妻、一一八二～？）の仮名書き無量寿経がある。無量寿経の音読を仮名書きしたものである。その仮名書き例の中に、次のようなものが存する（　）内は、対応する経本文の漢字）。

よ(耀)・て(殿)・を(応)・ほ(法)・しや(清)・しよ(照)・ねよ(如)・せう(徐)・てよ(徐)・もふ(望)・むう(茂)

右は、同時代に無量寿経の本文に音を加点した資料とは異なる。イ列・エ列合拗音（くゐ・くゑ等）も直音表記が多い。字音直読資料の実態も多様であることを示す好例である（佐々木勇・比治山女子短期大学日本語史研究会編「恵信尼写『仮名書き無量寿経』翻刻並びに対照本文漢字索引稿」〈『鎌倉時代語研究』第十七輯、所収〉参照）。

[2] 研究の余地が多く残されている資料

漢語の普及に伴い日本語話者に広く浸透していった漢字音は、さまざまに発音されたことであろう。これは、現代の外来語の発音からも想像される。ところが、いわば漢字音を聞きかじって覚えた人々の実際の発音がどのようなものであったのかは、資料の制約もあり、よくわかっていない。

そのような日常生活の場での漢字音を含め、さまざまな漢字音の実態を知るためには、各種の文献から、例を集めるしかない。

A. 辞書

当時の日常的な音の一つの規範を示しているのは、一般に活用された辞書であろう。

『倭名類聚抄』『類聚名義抄』『色葉字類抄』など著名な辞書の研究は存する。しかし、その他の辞書の音注を総合的に研究することは、多く今後の課題である。

B. 漢文訓読資料

字音直読資料に比べて、訓読資料は、補助的に扱われてきた。

訓読資料の字音をまとめた著書としては、柏谷嘉弘『日本漢語の系譜』（一九八七年、東宛社）・同『続日本漢語の系譜』（一九九七年、東宛社）がある。

しかし、多くの漢籍および和漢朗詠集・新撰朗詠集などの国書の字音が未整理のままである。

C. 仮名交じり文

仮名の交じり方は、文献によってさまざまであり、その表記の相違が、漢文に近いか和文に近いかの判断材料となることが多い。そして、これらの資料に記された漢字音も多様であることが予想される。

仮名交じり文のすべてに触れることは不可能である。以下、一般的だと思われる名称によって分類し、注目すべきものについて、記述する。

①漢字仮名交じり文

ここには、漢文を訓読したものをもとにする仮名書き法華経の類（往生要集・論語・選択本願念仏集等）から、いわゆる和漢混淆文・聞き書き・抄物・狂言台本等、多くの資料が入る。

仮名書き法華経を例にとっても、漢語は漢字で書き、それに振り仮名・訓注・義注などをほどこす妙一記念館本の類と、漢語も仮名書きされることが比較的多い足利本の類とがあり、一様ではない。

これらの資料中、影印が刊行されており、しかも、漢字に振り仮名が多く振られている親鸞遺文等が従来から注目されてきた。近年の影印刊行物では、「影印高田古典」（真宗高田派宗務院）・「冷泉家時雨亭叢書」（朝日新聞社）・「国立歴史民俗博物館蔵貴典籍叢書」（臨川書店）・「真福寺善本叢刊」（同上）などに、活用すべき資料が含まれている。

重

②和文資料

和文資料における漢字音については、従来、言及されることが少なかった。これは、転写を重ねた資料が多いことに加え、漢語は原則として漢字で書かれ、それらの読みが不明であるからである。

そのような中で、関戸家本『三宝絵詞』一一二〇年写本は、まとまった分量を残し、漢字に振り仮名が存する資料として注目されてきた。そして、本文の字音表記と漢字の振り仮名の表記法が異なることが指摘されている（春日和男『説話の語文』〈一九七五年、桜楓社〉）。

これは、本文と振り仮名、あるいは平仮名と片仮名との違いであると、単純には言えない。なぜならば、同時代に片仮名で書かれた和歌『極楽願往生歌』（一一四二年書写）に、和文的な字音表記が見られるからである（高羽五郎「極楽願往生歌の拗音の表記　―漢字音考察の一ｂａ―」〈「国語学」第四八集〉）。

また、藤田美術館蔵『阿字義』十二世紀末写本（『続日本の絵巻　7』〈一九九〇年、中央公論社〉収載。関戸本『三宝絵詞』と同様、漢字交じりの平仮名文であり、その漢字に片仮名で振り仮名を振る資料である。）の漢字に振られた片仮名は、次のように、和文の本文に通ずるものを交える。

衆生(スウシャウ)　純熟(シュンスク)　術(スツ)
出(スツ)　寿(スウ)　修(スウ)して　誦(スウ)する

ここに取り上げたように、『日本の絵巻』『続日本の絵巻』等で、現在容易に全巻のカラー写真を見ることができる絵巻の詞書きも、貴重な漢字音史研究資料である。

③仮名文書

文書中の漢語を、「けんちかんねん」（建治元年）のよ

うに仮名書きすることがある。これらは、従来、庶民においてはこのような表記も存したという程度に、補助的に扱われてきた。しかし、現在、日本漢字音として定着しているものは、結果的には、大部分、庶民たちが先行して用いた音である。よって、その全体を正面から取り上げた歴史的研究が求められる。

文書は、発信人・受信人が大部分判明しており、書かれた年月日も明確である。当代書写の現物が多数残る点でも優れた資料群である。『大日本古文書』『平安遺文』『鎌倉遺文』をはじめ、寺社・各家の文書が続々と翻刻公刊されている。県史編纂資料中にも多くの文書が見られ、研究資料は豊富である。

ただし、次の問題点がある。

第一は、仮名書きの語を、どの漢語に比定するかの判断が難しいことである。これは、仮名文書の文脈上判断するしかない。ただ、「平安遺文ＣＤ―ＲＯＭ版」、東大史料編纂所・国立歴史民俗博物館のホームページなどを活用して、同内容の文書を探し出すことが容易になったため、比定の精度は高くなった。

第二は、影印の刊行が少ないことである。その中で、久曽神昇『平安時代仮名書状の研究』（一九六八年、増補改訂一九九二年、風間書房）および『平安仮名書状集』（一九九二年、汲古書院）、黒川高明『源頼朝文書の研究　史料編』（一九八八年、吉川弘文館）等は、貴重である。文書の影印出版には、多くの問題が伴うであろう。しかし、近年発売された平安遺文の ＣＤ―ＲＯＭ版も、活字本『平安遺文』の誤りをそのまま残すのみならず、ＯＣＲで読みとった時の誤りが加わっている。そのため、言語資料とするには、原本またはその写真版で確認する必要がある。原本所蔵者は、インターネットでの公開など、なんらかの方法を講じてもらいたい。

D. 悉曇資料

沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』第六部は、漢字音とならぶ外国語音として、梵語音が存したことを強調し、漢字音の仮名表記に梵語音の仮名表記が与えた影響を挙げている。漢字音をいかにとらえたかを知るために、梵語音の受容を知る必要がある。

悉曇資料は、かつては資料閲覧が困難であった。現在は、馬淵和夫『悉曇学書選集』（一九八五～一九九二、勉誠出版）等により、研究できる。

E. キリシタン資料・朝鮮資料・中国資料

これらの資料は、仮名よりも細かな単位の音を表記しており、音韻研究上有効である。これまでは、主に国語音の資料として利用されてきた。漢字音研究では、入声

音・促音・連声・連濁などの研究に活用されてきた。しかし、漢字音全体の整理はできていない。

[3] 新出資料

右の諸資料とレベルが異なり、上記のすべての項目に関連する新資料群として、次の二つを挙げる。

A. 木簡・漆紙文書

各地で発掘されている木簡・漆紙文書の音仮名・平仮名・片仮名によって、当時の漢字音を知ることができる。森博達が、『日本書紀』β群の音仮名の分析から、当時の漢字音の日本語化を指摘した（『古代の音韻と日本書紀の成立』（一九九一年、大修館書店））ように、上代の木簡の音仮名の分析から何が知られるのか、興味深い。また、木簡は、近代まで使い続けられており、通時的な研究も期待される。

B. 角筆文献

小林芳規『角筆文献の国語学的研究』（一九八七、汲古書院）以後も、角筆文献の発見が相次ぎ、日本全県・国外からも資料が見つかっている。毎年、『角筆文献目録』（小林芳規編、私家版）が出され、一九九九年度版（二〇〇〇年三月一日発行）では、三〇七〇点を数えている。

木簡・角筆文献ともに、発掘・実態究明の時代である。

3 研究法

[1] 具体例の収集・整理

日本漢字音史の研究にも、誰もが使えるデータの蓄積が必要である。

現代では、それをコンピュータを用いて行なえるようになった。この道具を得たことの最大の利点は、膨大な調査をやってみようという気持ちになることである。

多くの用例を整理する際に、留意したいのは、用例を文脈に返すことができるようにすることである。

従来の日本漢字音の研究は、体系の究明に目的が置かれたために、実際にその音がどのような語の中で使用されているかという点は、例外を処理する場合にしか考慮されない感があった。どの文献のどの語の中にどのような意味で用いられているのかを、常に確認できるように整理すべきである。

[2] 中国語音韻史の学習

それぞれの用例の整理は、漢字別に行なうことはもち

ろんであるが、個々の漢字をこえた音体系の枠があると、資料別の比較が容易である。また、同一の漢字が見いだせない資料間の比較も可能となる。

そのような枠として、中国中古音の体系が用いられている。発表されている分韻表類は、この体系によっている。したがって、今後もこの体系による整理・比較が、まず行なわれるべきである。

そのためには、中国中古音の基礎知識が必要である。高松政雄『日本漢字音概論』（一九八六年、風間書房）・沼本克明『日本漢字音の歴史』（一九八六年、東京堂出版）などの当該部分から読みはじめ、必要に応じて参考文献に挙げられている著書に目を通すのが良い。

[3] 社会言語学的視点

日本漢字音史の研究は、中国語との言語接触に関する社会言語学的研究と言える。ここでは、その研究上、留意すべき点について触れる。

A. 筆者・読者の属性

誰がどのような読者を想定して、書いたのかという観点である。書写者の僧・俗の別、年齢差、性差などは、これまでも考慮されてきた。

B. 政治的・社会的条件との関係

これは、湯沢質幸『日本漢字音史論考』（一九九六年、勉誠社）において、必要性が強調され、論述されるところである。

C. 場面によるコード選択

どのような状況・場において書いたかを考慮することである。

中国語学では、「字音」と「語音」とを区別する必要が説かれている。「字音」とは、漢字音の規範のことであり、「語音」とは、日常における発音のことである（大島正二『唐代字音の研究』（一九八一年、汲古書院）序論、森博達『古代の音韻と日本書紀の成立』二九八頁、参照）。

よって、字音史は、規範の変遷史である。従来、主に字音直読資料・辞書によって積み重ねられてきた漢字音史の大部分が字音史である。

この字音の実態を踏まえた上で、書写者の語音を探求しなければならない。

このことは、現代語の状況を見れば、漢字音史の研究にも必要であり、言及もされて来た。しかし、歴史的資料の場合、それが記された状況にもどすことは、きわめて困難である。ただ、各種の資料が公刊されている現在にあっては、その努力をすることによって、当時の言語の状況についての推測を裏付けることが可能である。

佐々木勇「鎌倉時代における舌内入声音の諸相」（『鎌倉時代語研究』第二三輯、所収）では、それを試みた。

D. 言語接触

漢字音は、和語の音と接触し続けてきた。

木田章義「日本語の音節構造の歴史 ――「和語」と「漢語」――」（『漢語史の諸問題』〈一九八八年、京都大学人文科学研究所編〉所収）は、次のように述べる。

漢語の世界は和語の世界の上に乗った、知識音でしかなかった。不断に和語の世界からの侵蝕を受けざるを得なかった。和語の文脈で字音語を用いるときは、いっそう和語の音韻体系や音節構造からの変形を受けた。

小松英雄「字音研究の歴史史」（『国語国文学研究史大成15 国語学』〈一九六一年、三省堂〉所収）は、「国語音と字音とが、どのようにからみ合いながら体系的に変化してきたかという、いわば生態史的研究」の必要性を説き、「日本字音史を国語音韻史に対して独立の分野とみる見方は誤りである。」と述べている。

しかし、四十年近く経過した現在も、この観点からの研究は充分ではない。

[4] 他言語における漢字音との比較

越南漢字音・朝鮮漢字音の整理・考察に、それぞれ日本の研究者の優れた成果が存する。それらと日本漢字音の資料とをつきあわせ、その相違点についての考察を行なうことによって、日本漢字音の特性が明確になる。『蒙求』平安中期点・長承点と朝鮮漢字音とについては、沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』で、実践されている。

[5] 地域性の考慮

日本国内に限っても、同一時代に地域によって異なった漢字音が存したことが考えられる。日本漢字音研究を言語接触の研究ととらえれば、接触する和語の音の相違によって異なる漢字音が生じた可能性が検討されるべきである。各地の方言が漢字音にいかに反映されているかという問題である。

近年、「方言国語史」研究の重要性が説かれる。しかし、その考え方自体は、特に新しいものではない（藤原与一「国語史と方言」〈『国文学攷』第四六号、一九六八年四月〉などで言及されている）。問題は、それをいかにして行なうかである。平安・鎌倉時代に地方で写された字音直読資料・漢文訓読資料が現存することはまれであり、存したとしても、それらに方言が反映されている可能性は低い。古文書・角筆文献・木簡を読み解く作業を重ねるしかないと思われる。

4 むすび

科学の基礎は、事実の精密な観察である。

日本漢字音史研究は、いまだ各種の資料からデータを収集し整理する段階にある。

かつてと比べ、現在は、多くの影印が公刊されている。また、インターネット上に貴重な文献・資料のカラー写真が公開されるようになってきた。

一例を挙げれば、京都大学図書館ホームページの電子図書館（http://ddb.libnet.kulib.kyoto-u.ac.jp/minds.html）では、清家文庫をはじめ京都大学所蔵の国宝・重要文化財等の全頁を拡大カラー画像で見ることができる。従来であれば、損耗をおそれながら原本を閲覧するか、マイクロフィルム・写真を見るしかなかった。いずれにしても所蔵機関に出向き、限られた時間で調査しなければならなかった。

現代のわれわれは、先人の努力の結果、多くの資料とそれを整理する道具とを得ている。それを行なおうとする気持ちが先人たちに劣らなければ、日本漢字音史研究は、大きく前進することであろう。

（ささき・いさむ　広島大学助教授）

漢字・漢文ブックス

字源物語

――漢字が語る人間の文化――

加藤道理著　B6判・二三八頁　一五〇〇円（税別）

漢字は日本に伝来以後、わが国の人々の生活と文化を支えてきた。本書は、漢字の歴史や成り立ちを説くほか、生活に密着した漢字、一字一字について、本来の意味やそこから転じた意味など、字源にまつわる話を詳しく紹介する。

○目　次

1漢字の歴史と成り立ち（六書）
2人は偉大な存在―身体に関する漢字のいろいろ―
3人間生活の基礎　衣・食・住
4健全な家庭　幸せな社会―家族と社会についての漢字―
5人間生活の節目　冠婚葬祭
6人はいかに生きるべきか―道徳のあり方を求めて―
7漢字の字源からみた教育